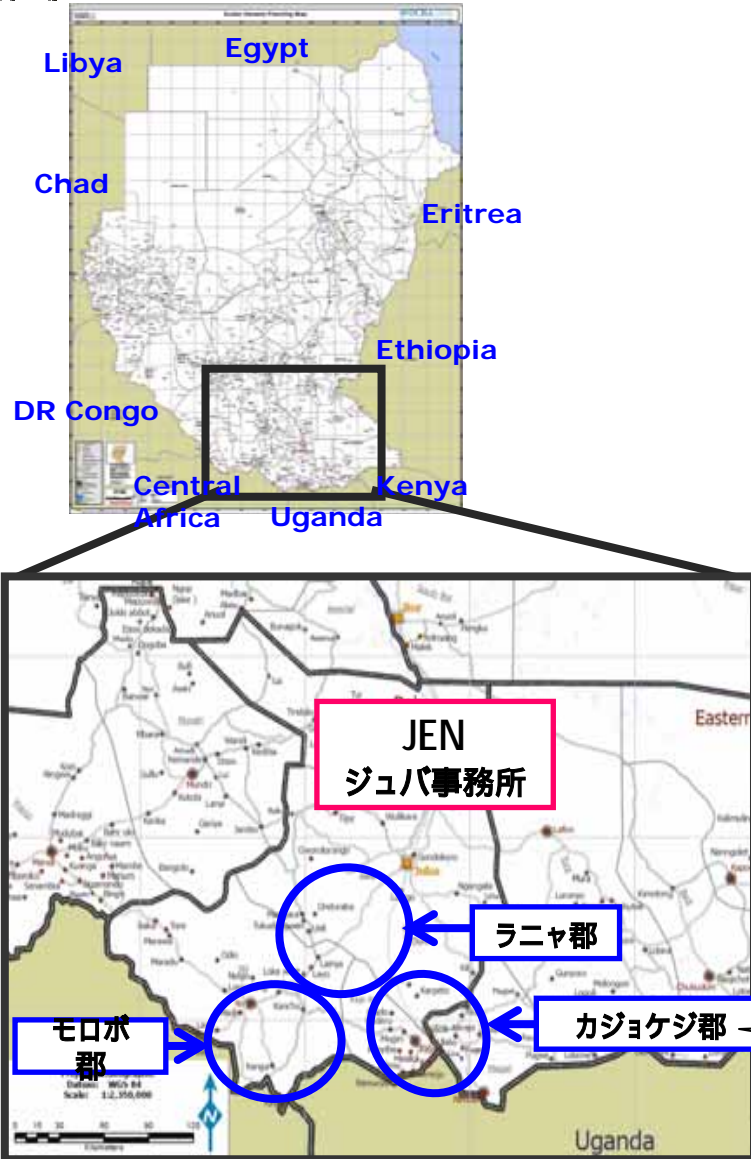




in スーダン



中央エクアトリア州

南部スーダンには、2005年の和平合意成立以来、多くの人びとが帰還していますが、隣国ウガンダの反政府勢力による攻撃や部族衝突が激化するなど、帰還先での生活は多くの不安にさらされています。

ジェンの事業地のひとつラニャ郡は、南部スーダン最多数の帰還民を抱えていますが、水を始めとするインフラが未整備のため、人びとの生活は安全と衛生からは程遠いのが現状です。2006年～2008年には、コレラが流行し、現在も下痢による乳幼児死亡率が高いなど衛生環境の整備と人びとの衛生意識の向上が急務です。

2009年は故郷へ帰還した人びとが安心して再定住の努力を続けられるよう、

- 衛生環境の改善
- コミュニティ全体の衛生意識の向上
- 効果が持続する仕組みづくりのサポートを行いました。

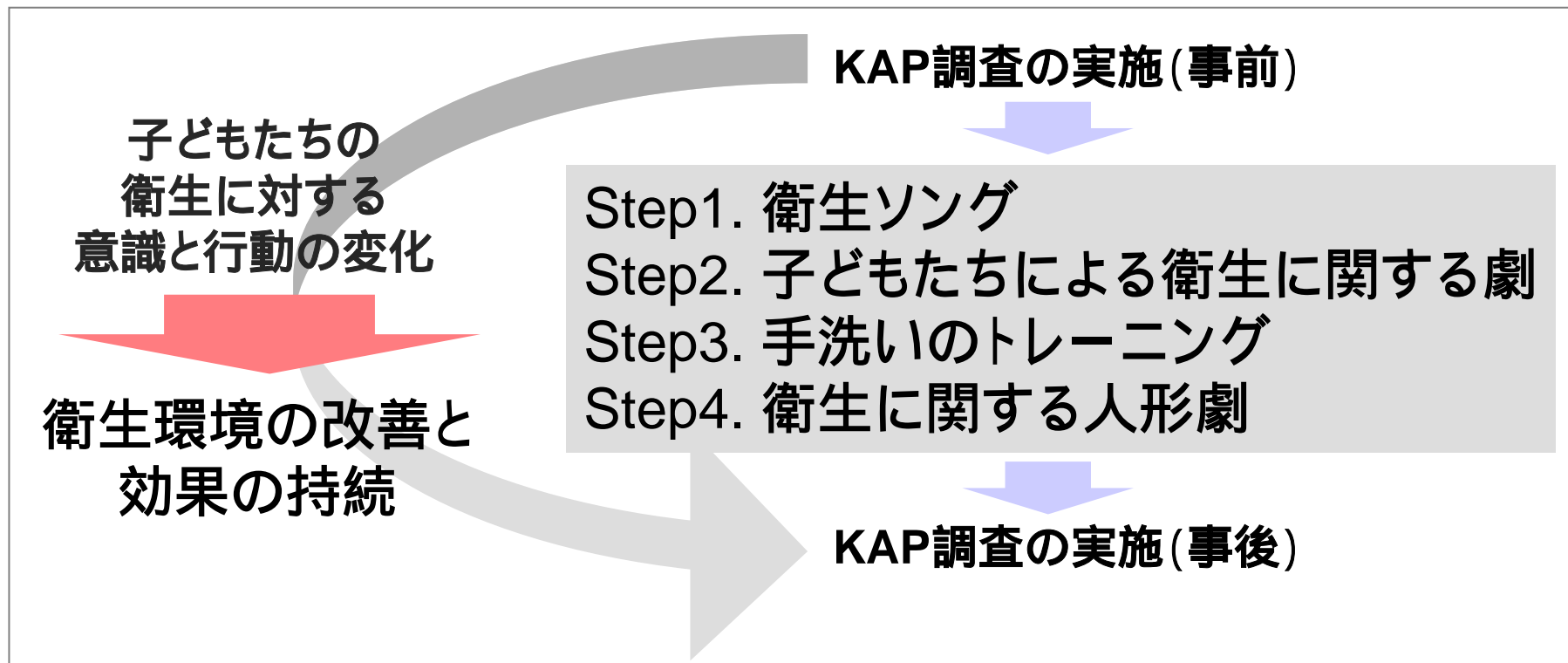
2009年から
ラニャ郡に加えて、
カジョケジ郡、モロボ郡に拡大。



事業ハイライト in スーダン/ 小学校での衛生教育



衛生教育の目的は、衛生に関する正しい知識を教え、守らせることではありません。問題の発見、分析や解決方法について、子どもたちが自主的に考える機会となるように取り組んでいます。



KAP調査: 子どもたちの衛生についての知識(Knowledge)、行動を変えることに対する態度(Attitude)、行動の習慣(Practice)を測る調査。



事業ハイライト in スーダン/ 小学校での衛生教育



衛生教育が広がっていくと、
「習慣」が生まれ、コミュニティ全体の衛生改善に繋がります。



●事前調査がカギ

最初に、子どもたちの「清潔度」や、清潔な行動を取ることを躊躇している理由を調べるために、事前調査を行います。衛生教育実施前の子どもたちは、衛生に関する独自の「理解」を持って生活をしています。たとえば「家にトイレがないけれど、遠くの茂みで用を足せば、病気にならない」「下痢になったら、砂糖、水、塩に加え、コーヒーや泥をまぜると効く」というようなものです。下痢は時に脱水症状を招く非常に恐ろしい病気です。衛生教育は、このような子どもたちの衛生に対する意識と行動の変化を促進することを目的にしています。

●人形劇で「習慣」に

「どうしてお腹が痛くなったのかな？」
ジェンでは、2007年から人形劇を衛生教育のツールとして使ってきました。写真は「主人公のロコロニョくんが手を洗わずマンゴーを食べてお腹がいたくなる」シーン。衛生や保健教育を受けていないスーダンの帰還民の子どもたちは、その理由を知りません。その理由を人形劇で問いかけます。メッセージを確実に伝えるために、手を変え品を変え、あらゆる手段でアプローチします。



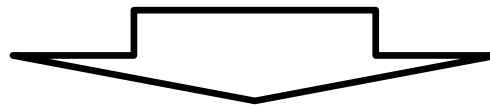


事業ハイライト～井戸管理委員会



地域(コミュニティ)のメンバー7名からなる委員会で、学校に建設した井戸とトイレの維持・管理をします。井戸を使う住民から井戸の管理方法についてのアイデアをつのり、自分たちでできる管理の方法を決めていきます。

- **井戸のまわりに動物をよけるためのフェンスを設置**
井戸を動物の糞や細菌などから清潔に保ちます
- **コミュニティの人びとと、井戸使用に関するルール作り**
(井戸の使用時間、故障時の対応など)
コミュニティの人びと自らがメンテナンスを行い、継続して使える環境を整えます。
- **コミュニティの人々から、井戸使用料金(維持管理料金)の徴収**
メンテナンスにかかる費用をコミュニティで賄います。



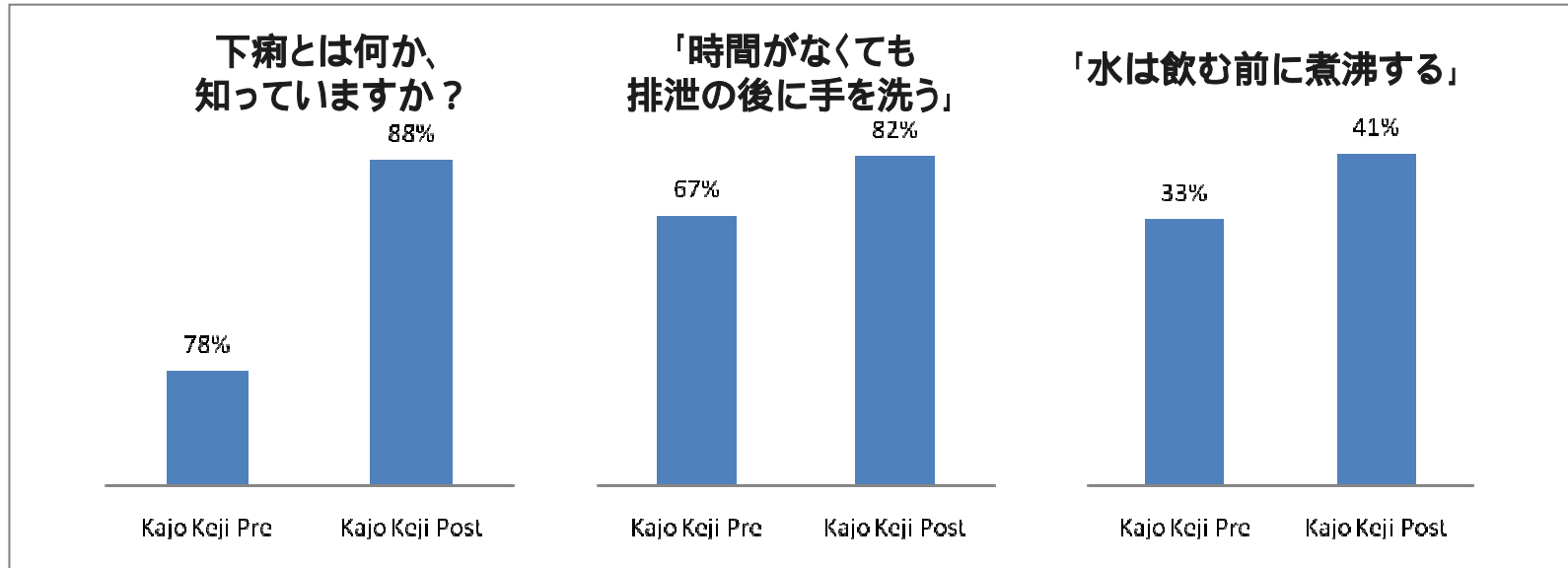
オーナーシップが生まれて**効果が持続**するしくみ作りを支援



変化と効果



知識・意識づけ・行動が変化し、下痢になる頻度が減少



モロボ郡・カジョケジ郡の小学校で下痢になる頻度が改善

1週間に一度以上	モロボ郡(44%	27%)	カジョケジ郡(49%	40%)
1ヶ月に一度以上	モロボ郡(77%	59%)	カジョケジ郡(84%	70%)

データは全てジェンがモロボ郡、カジョケジ郡の40校3,513名の生徒を対象に行ったKAP調査による。



変化と効果



人びとの自立とコミュニティの成長



「自分たちの井戸は自分たちで何とかする」

井戸の修復は、南部スーダンの水と衛生の分野で、最も優先順位が高いものの一つなので、工程を通じて、コミュニティ全体が修復のスキルを身につけることが重要です。

ある村では、4本のうち3本が壊れていて、水が出ない状態でした。「どう修復するか？」をジェンと人びとで話し合いました。その結果、費用は村とジェンが半分づつ負担をする案が採用されました！今後も各自がお金を出し合って、井戸を維持し、管理していくことになりました。

ここで重要なことは、コミュニティが費用を負担することではなく人びとが主体的に参加することが何よりも大切なのです。



コミュニティの資産としての井戸の利用・管理

ベティー・アヨゾさん(23歳)は、家から徒歩1キロ歩いてオンバチキリコ小学校に水を汲みに来ます。混んできるときには列ができ、1時間以上も待たされます。それでも、ここは、安全な水を汲める唯一の場所。ここに井戸ができる前は、小川の水を料理に使っていました。学校にある井戸を使う家は、一世帯当たり1ヶ月1ポンドのメンテナンス料を井戸管理委員会に払っています。井戸が学校の敷地内にあるので生徒が優先的に使いますが、井戸は地域全体の人びとの衛生環境を担っています。



変化と効果



持続する「自立」の効果

プロジェクト終了後に現れた効果

2009年5月。3月末まで井戸 & トイレ建設のプロジェクトを行っていたラニャ郡の小学校をジェンのスタッフが訪れました。

そこでは、新しいことが起こっていました。



今まで建物がなく、木の下で学んでいた学校に、なんとシェルターができ、井戸には柵が完成していたのです！子どもの数も倍に増え、運動用の場所もできていました。住民の協力で作った井戸の柵やシェルター、それに学校の敷地。人びとの自立する力は、このように、将来、様々な形で実を結びます。